

第7分科会

子どもとともに作り出す

環境構成

助言者	高附 恵子 (日本幼年教育研究会講師)
司会者	西原 美緒 (東俣幼稚園)
問題提起者	神園侑里香 (恵光幼稚園)
記録者	松元 夏蓮 (恵光幼稚園)
	稲葉 里美 (恵光幼稚園)
ホスト	森山 剛充 (はなぶさ幼稚園)
ホスト	宮谷 竜平 (はなぶさ幼稚園)
運営委員	栗山俊一郎 (伊敷幼稚園)

【研究課題】

保育実践 (E 分野)

【研究・研修の視点】

幼稚園教育は、「環境を通して行う教育」が基本である。環境を構成するとは、物的環境や人的環境など、様々な環境条件を相互に関連させながら、幼児が主体的に活動を行い、発達に必要な経験を積んでいくことができるような状況を作り出すことであるととらえた。幼稚園教育要領の幼稚園教育の基本でもあるように、教師は、幼児の主体的な活動が確保されるよう幼児一人一人の行動の理解と予想に基づき計画的に環境を構成しなければならない。そのことから、幼児が主体的に活動するためには、環境がどのように構成されているかによって大きく左右されるのではないかと考える。幼児が興味・関心をもち、思わずかかわりたくなるような物や人、事柄があることで、幼児の興味や関心が深まり、意欲が引き出されるのではないかと考える。また、やってみたいと思えるようにすることで、試行錯誤を認め、時間をかけて取り組めるようにすることも大切ではないかと考える。そのような主体的な活動をするためには、幼児がありのままの自分を出せる教師との信頼関係のもとで、安心感や安定感が基盤にあることも大切であると考えている。

何気ない幼児のつぶやきから始まる活動のなかで、幼児自身がもつ発想をいかに言葉や行動で表現できるのか、教師はその幼児の発想に共感し、それをどのように環境構成に生かしていくのか、そこから子どもとともに作りだす環境につながっていくのではないだろうか。そのようななかで、教師の意図や願いを大切にしながらも、教師主導型の保育になってはいないか、幼児が主体的に活動しているのか、幼稚園教育要領の5領域のなかに含まれている「環境」のねらい及び内容にも目を向け、今までの保育実践を振り返り、保育の見直しを行うことから研究を深めることにした。

【研究の手がかり】

- ・ 幼児がどのようなことに興味や関心があるのかを念頭に置き、活動のなかで幼児自身の意欲を高めることができる環境は、どのような環境であるかを日々の保育をとおして考える。
- ・ 幼児が主体的に活動するために、教師はどのようにかかわることが、幼児自身の考えや思いを引き出すことにつながるのか、日々の保育の反省を通して考え、課題を明確にする。

【研究計画】

◎令和4年度

- ・ 幼児が主体的に活動できる環境を構成していくために、幼児の意欲を引き出し、教師の願いとバランスよく絡み合うようにするための保育はどうあるべきかを考える。

◎令和5年度

- ・ 「主体的・対話的で深い学びを目指して」をサブテーマにして、イメージ図などをもとに保育実践を深めていく。

【発表の概要】

1 研究・研修テーマのとらえ方

幼稚園は、幼児にとって初めての集団生活の場で、自分の思いをのびのびと表現できるようになるには、まず、安心できる環境であることが大切ではないかと考える。そのために、本園では教師は幼児のありのままの姿を受け入れ、まずは信頼関係を築いていくことを大切にしている。そこから、安心して自分の思いを素直に表現し、幼児がやってみたいと思えるような環境を整えていくことが、大切ではないかと考える。これまで、年齢に応じて人的・物的環境の工夫を行ってきたが、保育を振り返ってみると、教師主導型になっているのではないかと、集団をまとめるために、指示が多くなっているのではないかと、などが課題にあげられた。教師主導の一方的な保育の展開ではなく、一人一人の幼児が教師の援助のもとで主体性を発揮して活動を展開していくことができるように、幼児の立場に立ち、環境を構成することが、子どもとともに環境を作り出すために必要ではないかととらえ、研究を深めることにした。

2 研究の内容

- (1) 何気ない幼児のつぶやきを大切にされた保育活動の在り方。
- (2) 幼児の意欲を引き出すための教師の役割や環境構成につなげるための援助の在り方。

3 研究の方法

- (1) 園内研修
 - ・ 町づくりから電車ごっこや町並みづくりに発展していった保育実践等を通して、幼児の活動へのかかわりや環境の構成方法、教師の援助について意見交換を行い、研究を深める。
 - ・ 幼児が主体的に活動するための環境を構成するうえでの教師の役割について話し合い、それぞれ教師が自らの保育を振り返り、課題を明確にし、実践しながら研究を深める。
- (2) ブロック研修
 - ・ 1ブロックの園長、主任会や全体会で、研究内容等の意見交換を行い、研究を深める。

4 実践例

- (1) 画用紙をつなげた大きな紙や、折り紙、家や木の絵が描かれている塗り絵などを使って町づくり制作をグループごとに行ったことをきっかけに、電車づくりやムーミンの町づくりへと発展していった事例（年中児）
- (2) 毎年恒例のお店屋さんごっこで、話し合っただけの「温泉ごっこ」をとおして、環境を整えるために行った幼児同士の話し合いや教師の援助方法をとおして、試行錯誤しながら幼児とともに環境を構成していった事例（年中児）
- (3) 実践例をとおして、教師自身が課題を明確にしたうえで、保育を展開していき学びを深めていった事例（各クラス）

5 まとめ

研究をとおして、幼児が自分の思いをのびのびと表現し、考えを相手に伝えたり、活動に対して意欲的に取り組むことができるようになったりするためには、教師のかかわり方がとても重要で大きいことや難しさを感じた。教師は幼児が何に興味や関心があるのかを見極め、幼児のつぶやきや行動にアンテナを張り巡らせ、やってみたいと思えるような保育内容を計画していき、その計画を柔軟に修正しながら保育を展開していく必要があると感じた。やらされているのではなく、自分でやってみたいと感じる事、自分で考えて行動に移すということが、主体性につながるのではないかと。子どもとともに環境を作り出すために、幼児の主体性を大事にしていきたい。

6 今後の課題

- (1) 幼児の主体性を引き出すための教師の援助のあり方。
- (2) 集団のなかでの一人一人の主体性を大切にしていける方法。

【討議の柱】

- (1) 幼児の主体性を引き出す方法。
- (2) 子どもとともに作り出す環境を生み出すための保育とは。

【問題提起についての感想】

- 活動の中で、教師の見通しだけでなく幼児自身も見通しをもつことが大切だと感じた。視覚教材や保育の振り返りをする 것도大切だと思った。つぶやきというキーワードが多く上がった。今後もつぶやきを拾い、意識して保育をしていきたいと思う。
- 活動の振り返りが良いと思った。振り返りをすることで、幼児が次の活動に繋がっていく。また、自己の変容、他者の変容に繋がっていると思った。

【助言者のまとめ①】

- ・ 人的環境と物的環境の二つに分かれ、人的環境が多くあがっていた。
- ・ 同じ園、同じ学年の教師同士で自分の意見を伝えながら、他の教師の意見にも耳を傾け、環境について話し合うことが大切。
- ・ 子ども達の気持ちを、どれだけ教師が読みとっているか、タイミングを見計らってれば、その活動を長く続けられれば良いということではない。
- ・ 教師の思いと、子どもが「もっとやりたかった。」という気持ちをタイミングよく繋げられた事例だった。
- ・ 主体性というのは、幼児が考えて活動することだけではなく、教師の働きかけが大切である。
- ・ 教師自身が、何ができるのかを考えることが課題である。また、幼児にとって身近にいる教師が一番の環境である。

【グループ討議（ブレイクアウトルームでの協議内容）】

- ルーム 1 (1) お店屋さんごっこの事例が多くあがった。
- ・ 好きな廃材を選んで主体的に、取り組めるような環境を作る。
 - ・ 幼児の少数意見を拾い、作りたいものを聞きながら、保育を進めている。
- (2) やってみたいと思えるような導入や環境の作り方が大切。
- 一人一人の発達段階や興味を見極めて援助すること。
 - 意欲や自信に繋がる声かけを行うことが大切。
 - 教師の願いや思いを含めた意図的な環境構成や教師の援助が大切。
- ルーム 2 (1) 夏野菜の栽培をきっかけに、幼児の意見を取り入れながら壁面を作った事例。
- 各自でこいのぼりを作ったが、幼児の意見を取り入れ、クラスで大きなこいのぼりを作った事例。
- (2) 自らつぶやかない子に対して、保育者自ら何に興味をもち、何を考えているのかを引き出すことが大切。意見を言うことが難しい幼児に対し、幼児同士が意見を出し合う環境をつくり、保育者が仲介に入りながら、主体性を広げていけるよう心掛けることが大切。
- ルーム 3 (1) リバーストーンという石を丸く部屋に置いたことで、幼児のつぶやきによって、魚釣りごっこから水族館作りへと発展し、さらに金魚すくいまで遊びが広がった事例。
- (2) 消極的な幼児に対して、何かヒントになるような物的環境を整え、幼児の言葉を引き出している。
- ルーム 4 (1) 学年よっての保育の在り方。
- ・ 年中少では、教師の見本に寄せて作っていたが、年長では作りたいものを作っていた。
 - ・ 設計図を作ったり、道具の準備をしたりと失敗しながらも、すべて自ら行っている年長の事例。年中少時の学びの経験や考えが生きているのではと感じた。
- (2) 好きな遊びを自ら選択しながらしている朝の自由遊びのなかで、興味関心を引き出せるような保育者のかかわりが大事。
- 認めてもらうことが自信に繋がるので、そのような言葉がけが必要。
- ルーム 5 (1) 幼児が興味関心のもてる環境を整えるなかで、幼児が様々な力を身につけている事例。
- ・ 作ったら終わりではなく、サークルタイムや振り返りの時間を設けている。

- (2) 上の学年の幼児を見て、下の学年の幼児が真似をすることで、主体性が生まれる。クラスで流行っている活動を見て、幼児が興味をもったことを、園全体で取り入れるという活動も、主体性につながれるのではないか。

- ルーム 6 (1) 事例に多くあがったのが「お店屋さんごっこ」
・教師主体の活動が多かったという反省を生かして、幼児の意見を取り入れられるように、園外保育などでイメージを膨らませ、興味関心を深めてから話し合いを行う。
- (2) 幼児の意見をホワイトボードにまとめることで、意見を認めてもらったという自信に繋がり、話し合いが活発に行われるのではないか。
幼児に寄り添う気持ちは大事。日頃からコミュニケーションをとることで、たくさんさんの経験を重ねながら、遊びを発展させたり深めたりできるのではないか。
- ルーム 7 (1) 幼児が主体となって、廃材で動物を作り、年長が動物園を開き、年下のクラスを招待して楽しんだ事例。
- (2) 幼児がたくさん会話をするなかで、何に興味があるのか記録をとる。
視覚的な環境を準備することも大事。
幼児の要望をできるだけ叶えてあげることができ環境作りも大切。
- ルーム 8 (1) 記録の取り方についての話になり、つぶやきや保育についての記録をどのようにとっているかについて話をし、勉強になった。

【助言者のまとめ②】

- ・ 幼稚園教育要領の保育の基本「一人一人を尊重する保育」「子どもの主体性を尊重する保育」「環境を通しての保育」「遊びをとおしての総合的指導」などの原則は理解しているが、実践となると園によってクラスによって、教師によって様々である。
- ・ 戦前のときから、幼稚園は小学校の下請けのような評価で見られていた。幼稚園は小学校の下請けではないので、幼児が何に興味をもっているのか考えて保育を行っていくことが大切である。
教師が指導しないと幼児は何もできないという考え方を根本的に変えることが大切である。幼児には、様々な力があり、その中で環境や教師がかかわっているという考え方に変わってきている。
- ・ 実際に保育を行って行く中で、「これは、お約束ね。」という声掛けは、教師が幼児に守らせたいことで、幼児が守らないといけないと思ったことではない。「お約束」という言葉を使わないようにしよう意識することで、少し保育が変わった経験がある。
- ・ 環境構成は、教師の意図どおりの活動を生み出す手段やテクニックではなく、子どもが自ら活動に向かうための願いと配慮である。
- ・ 教師が予想しなかった反応や発想、思いがけない活動の展開を尊重し、できる限り受け入れて環境の再構成が大切である。幼児のそれぞれの感じていることや表現したいことを受け止めてくれる教師の存在がいて、生き生きと環境に向かっていける。
- ・ 幼児の意見を引き出すような声掛けを意識することで、教師も幼児の言葉に耳を傾けられたり、予想しなかった行動に対しても対応ができたりする。「保育が楽しい」と感じると、保育も変わってくる。
- ・ 教師の意図的なことをやっちはいけないということではない。幼児に任せるだけでなく、様々な刺激があったり、教師の働きかけがあったりしてこそ、幼児の年齢によって経験が生かされてくる。刺激がなければ、工夫やアイデアは出てこないため、教師の役割は大きい。
- ・ 環境としての教師の役割は、先生自身が遊ぶ力、遊びをどう面白くするかという発想をもつことが大切である。教師も人から言われたことをする経験はあっても自分で作り出していく経験は少ない。幼児教育は結果を大事にするのではなくプロセスを大切にする。
- ・ 教師のもつ自由な雰囲気、温かい雰囲気、教師の物の扱い方、話し方、人とのかかわり方などを幼児は見ている、憧れをもって真似る存在になれるようにする。